隠岐島前高校郷土部収録

海士町の民話から(24)

■再話・解説

酒井董美（山陰民俗学会会長、元隠岐島前高校郷土部顧問）

ソバ（蕎麦）の赤足

語り手…浜谷 包房さん（御波、昭和３年生まれ）

とんと昔があったふうでごわすわな。むかしゃ麦でもソバ（蕎麦）でも、人間が都合のいい時に種めえて、また都合のいい時にわっわれ（自分）から取り入れしよったもんだふうでごわすわな。

ある秋の頃だったそうです。お大師さんが行っかけたところめが、大きな川に出合いまして、

- こら、困っただ、この川渡らんならんだが - と思ってみたところが、橋はありゃせず、どうしようか、と思案しとったふうですわ。

そけえ（そこへ）麦とソバとが連れだってやって来たふうだわな。こりゃ、いいもんが来たわいちゅうで、

「よい、よい、おまえらちゃ、だっぞ、だ（わたし）を負って向こうまで渡(わて)えてごさんか」

と、こう言ったところがせえ、秋のことなら水は冷(つん)たなり、どうもいやなふうで麦もソバも黙っちょったです。

「麦よ、主(のし)ゃどげな、だ（わたし）を渡(わて)えてごさんか」って言ったに、麦は、ま、水は冷(つん)てもんだけん、

「いや、そっはなんましぇんだ。わしゃこっからのう、種を播かれに行かななんましぇんだけんの」

こう言って、せ、逃げてしまった。

しゃねえだけん、

「ソバよ、頼むけん、主(のし)ゃ、だ（わたし）を渡(わて)えてごさんか」

ソバは、け、気がいいもんだけ、

「そんな、ま、しゃござんせんだ。こけ（ここへ）負われさっしゃいな」と背な向けてけえ、脛(すね)までけ、からげて、川を渡(わて)えたふうですわ。

ところがせ、秋のことなら、水は冷(つん)てなり、足はなんも赤んなったふうですわな。

それをお大師さんが見さして、

「ああ、よし、よし。かわいそうにな。主(のし)や今日はだを渡えてげえただけん、主(のし)やなんば足が冷(つん)たあても赤あなっても、け、雪の降んまでに、主(のし)や取り入れすっやあにしてやっけん。そんに引っかえて、あの麦のやつは汚(きった)ね。がいな（たいへんな）大嘘つうてからに、逃げてしまった。あいつぁ、こっからどげでも冬に向かって種播きすっやあにけえ、どげでも、そげさしてやっけん」

それで、今度(こった)ぁソバは雪の降る前に取り入れてしまう。麦はそん代わりけえ、播かれてけ、雪のある間中、山でけ、冬中、こげして（こうして）こちけちょっと（凍っていると）、そげなふうになったふうですわ。

そっだけ（それだから）、何でも人の頼みちゅうもんは聞いてやらにゃ、こら、ようごわんしゃん、そげなようなことでござんすわな。

■収録：昭和51年8月21日

■聞き手：大野晃子、添田シゲ子、佐野敏子、浜谷深希、酒井董美

【解説】　関　敬吾博士の『日本昔話大成』には掲載されていない話型である。最後に教訓がさりげなく語られているところが、昔話の機能を示している。これはけっこうよく知られている話のように私には思えてならない。以前、たしかにどこかで聞いた話のように思う。語り手の浜谷さんの話術のうまさに聞き手は引き込まれていた。当時、東京に本部のあった民話と文学の会の島前民話調査のおりうかがったものであり、聞き手の浜谷深希さんは浜谷さんのお子さんで郷土部員、それと酒井を除けば民話と文学の会員のみなさんだった。

イラスト／福本隆男（崎出身、三郷市在住）